

心の窓は開いていますか

5年 A・Sさん

私が通っている英会話教室には様々な国から来た日本語の流暢な先生がいます。髪の毛の色や肌の色はもちろん、母国語が違うので英語のアクセントも違います。私は小さい時からこの英会話教室に通っていたので、違和感なく外国人を身近に感じていました。

しかし、この本を読んで少し見方が変わりました。私が違和感なくいられたのも、先生達が日本文化に合わせてくれていたからではないかと思っただけです。先生達が、もし「郷に入っては郷に従え」を実践していたとすれば、今までの価値観では行動できません。理解しがたいことに直面しても、異文化に身をおいていると自覚しなければならぬため、とても努力を要したことだろうと思います。

父がロンドンに単身赴任をしていた時、職場にも様々な国の人がいて、意見や感情の食い違いは珍しくはないことだったそうです。悠介がミンミンに「空気を読んで」と求めたように、父も「空気を読む」ことが染み付いていたので、赴任当初は周囲の反応をおもんばかって自分の意見を言わないようにしていたようですが、欧米圏の同僚に「最初から率直に意見を言ってほしい。」と言われたこともあったそうです。そんな父が「人間関係は免震構造の建物と似ているかな。たわやかに揺れて自分とは違う摩擦や振動を吸収するから、初めは大きな揺れでも次第にその揺れは収まっていくよ。」と教えてくれました。ぶつかり合うことで相手を理解し、それが次へとつながっていくのだと気づきました。

私も無意識に空気を讀んだり、察したり、あうんの呼吸で毎日を過ごしています。ただそれは日本のように集団の「輪」を大切にすることで通用することで、世界の「個」を大切にすると個人主義の国では理解されにくいと思います。父が「はっきり言ってほしい。」と求められたように、日本人は自分と違う文化圏のことも受け止めて学んでいかななくてははいけません。外国人だけでなく、家族、友達そして身近な人と、お互いを深く理解するために目を向け、耳を傾け吸収し、そして自分の意見を述べ交わし、衝突していく交流戦は豊かな美りをもたらすのではないかと思います。